

## 半促成キュウリの異常生育の症状について

吉村邦敏・古田勝己  
(熊本県農業試験場八代支場)

YOSHIMURA, K. and FURUTA, K.  
Studies on the Abnormal Growth of Cucumber in plastic house

熊本県の半促成キュウリ栽培で、昭和36年から原因不明の異常生育症状が発生しており、化学部や病虫部と一語に原因解明に努めてきた。著者らは当支場の施肥試験ほ場でこの症状の発生をみたので、その異常生育の症状と発生状況について報告する。

1) 異常生育発生経過と症状：昭和37年に発生した八代郡宮原町の調査によると、発生した作型は殆ど半促成栽培で、3月下旬頃に新葉が急に黄ばみ、新葉の葉縁が内側に巻込むようになる。4月中旬頃になると濃緑色の縮葉に変わり、心止りする。果実はイボが少なく濃淡の縦縞模様ができ曲り果となる。

昭和39年に発生した宇土市のものも同様な症状で、カボチャウイルス病によく似ているが、症状が軽い様は新葉が黄化しても回復することや、上方の側枝は正常な生育を示し、果実も正常になることが特徴である。発生の時期は低温時で、定植直後から発生する場合と、第2回追肥時期頃から発生するものに分けられ、低温や施肥量に関連があるものと推察される。

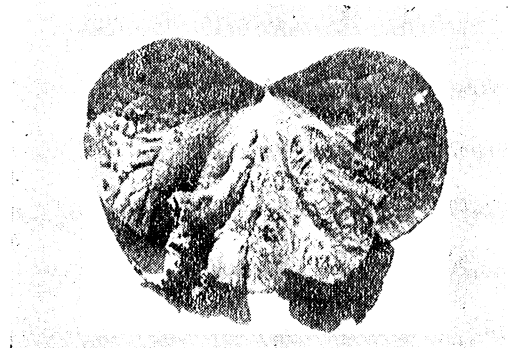
2) 施肥量試験に発生した試験区：当場の半促成における連作に関する試験の中で施肥量がハウス10a当りN成分量の60kg以上の多肥区に発生し、それ以下の小肥区や無肥料区には全く見られなかった。また、速成床土の施肥量試験のなかで、鉢の土量1kg当りN成分量で0.5g以上の多肥区に本症状が発生し、無肥量区や少肥料区には全く発生しなかった。N成分量の0.5g区でも硫酸、過石、硫加による配合区は全株発生したが、この単肥配合区に炭酸石灰3g混合した区や同一成分量でも硝酸加里区とAM入り肥料区等は全く発生しなかった。発生した試験区の電導度EC(1:2)が3.8mV以上となり、PHは4.3~4.5と低い値を示したことから本症状の原因解明に、何等かの足がかりになるものと思われる。

3) 他の障害や病害による症状との比較：まずウイルス病についての疑いもたれるが、病虫部の接種検定結果では(-)で、また、発生ほ場で健全株との呼び接ぎによると、健全株には全く症状が見られな

かつた、一方2・4 Dのホルモン散布による濃度障害の症状と比較してみたが、全く異なつた症状であることが分つた。

4) まとめ：キュウリの異常生育は、ウイルス病や除草剤などのホルモン散布による濃度障害とは明らかに異なる症状であつた。低温時期のハウス栽培特有多肥栽培との関係が濃厚で、一種の栄養生理障害と考えられる。

異常生育の古葉



異常生育の果実

